

美しくなつかしい、日本をのせて。

Cradle

「クレードル」出羽庄内地域文化情報誌

3

2016 March/April
TAKE FREE
NO.34

特集
私たちの
庄内暮らし
庄内憧憬
後藤靖子 JR九州常務取締役



鶴岡市 / 庄内海岸沿いの桜と鳥海山

Cradle 3 「美しくなつかしい、日本をのせて。」
「クレードル」出羽庄内地域文化情報誌

2016 March/April
平成28年3月1日発行(隔月奇数月発行)第6巻4号(通巻34号)

発行 / Cradle事務局 山形県鶴岡市山王町8-15(株)会社 出羽庄内地域デザイン 電話0236(64)0888
制作 / Cradle編集部 山形県酒田市京田2-59-3「コアック・モバイル・ラボ」電話0234(41)0012

春光に桜明るく 大地芽吹く庄内



山形、庄内が、自然風土に培われた歴史や文化を大切に、多くの人の心にしみいる地であり続けてくれる、と信じています。

人の心にしみいる地

後藤靖子

私がはじめて庄内の地を訪れたのは秋本番。日本海まで広がる金色に輝いたんぼ、「…ですのお」というやさしい言葉、何気ない日常の時間でしたが、それは消えることのない記憶でした。その何年も後に山形県副知事に就任するとはその時は想像もできませんでした。だが、その後庄内の地ですばらしい出会いがあり、大切な記憶をさらに積み重ねることができました。その大切なものの中に「三餘」という言葉があります。致道博物館の御隠殿「三餘室」で酒井家の皆様に教えていただきました。三餘とは「冬は歳の余り、夜は日の余り、雨（陰雨）は時の余り」からとったもので、無駄な時間のように思えるときにこそしっかりと勉強せよ、という意味だと伺いました。この精神が、思慮深く勤勉な庄内の地を象徴しているように感じました。

私は1年ほど前から、九州で仕事をしておりますが、九州と東北山形とは気質がまったく違います。冬でも暖かい陽射しが多い九州の人は、考える前に行動している感があります。例えば「地域の活性化とは何か」を考える前に列車に手を振っている、というように。そのすばやさにはまぶしくもあり、雪国のじっくりじっくり考える様子にまどろっこしさを感じることもあります。が、考えて行動を始めたあとの粘り強さは山形の方だと思います。派手ではないけれど地道な努力。それがきつと山形の強みなのだと。

私が副知事時代に取り組んだことのひとつに「山形観光まちづくり塾」があります。県内の多様な人が集まり、専門的知識を学び、議論する習慣をつけ、行動力をつけることを目的にスタートしました。そこに参加した県内各地の若



致道博物館 酒井氏庭園

手（自称も）は、「他の地域にこんなすばらしい人がいたのか」「こんなおもしろい取り組みがあったのか」と気づき、自分の地域の良いところやそうでないところを客観視することができるようになり、「次にこんな取り組みをしたいからあの人に相談してみよう」といったように活動の輪を広げるようになったと思います。それを可能にしたのは、メンバーそれぞれに、地域に対する切実な思いや、学び経験したことを生かしているという真摯さがあったからです。一人ひとりが山形を支える存在になっけてくれていること、とても嬉しく誇らしく思っております。これからも、このメンバーをはじめ山形の方たちが、土地の持つ自然風土、そこに培われた歴史や文化を大切にして、山形・庄内が多くの人々の心にしみいる地であり続けてくれる、と信じています。

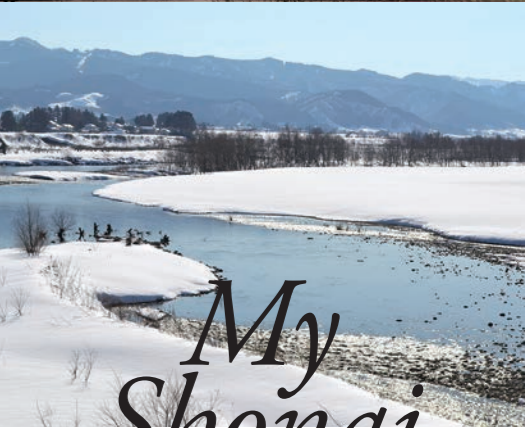
ごとう・やすこ／JR九州常務取締役。1980年東京大学法学部卒業後、運輸省入省。運輸政策局観光部企画課企画調査室長、海上保安庁国際危機管理官、国際観光振興機構ニューヨーク観光宣伝事務所長を歴任。2005年10月から2008年7月まで山形県副知事を務める。2008年7月、北陸信越運輸局長、2010年国土交通省大臣官房審議官、2013年国土交通政策研究所長。2014年10月JR九州顧問に就任。2015年6月より現職。



生まれ育った場所から離れて
別の土地で生活を始めた人たちは
そこに”当たり前“にあるものの
価値に気づき、光を当てながら
自らの生き方を創造しています。
美しくなつかしい日本をのせて――
ここで暮らす人たちの毎日が
庄内の美しさに多彩な色を与えています。

特集

私たちの 庄内暮らし



My
Shonai
Life
Special Edition

地域の特産物・庄内柿の生産者として。
限界集落といわれる山村で地域おこし協力隊として。
2人が模索する、新しいナリワイの姿。

Satuma Mataka

佐久間 麻都香さん

集 特
私 たちの
庄 内 暮らし
My Shonai Life

ナリワイを

田口比呂貴さん
Taguchi Hiroki

創る人

生きるための農業を、この地で



山の暮らしを体現できる人間に

◎ 鶴岡ナリワイプロジェクト
「好きなこと×世の中にくいこと」で小さなナリワイを生み出し、自分たちで未来をつくるという民間の女性発プロジェクト。2015年度は、実践コースと入門コースがあり、実践コースで佐久間さんはじめ、18名がナリワイづくりに取り組んだ。実践コースは、公益財団法人トヨタ財団の助成事業（2015～2016年度）。入門コースは、鶴岡市の若者しごとづくり事業、モル起業促進事業。

を応援する「鶴岡ナリワイプロジェクト」のこと。参加した佐久間さんはそこで「柿守人」を立ち上げ、放置された柿の木の手入れと無農薬の柿の葉茶販売のビジネスを始めました。「最初は放置畑の担い手について考えていたんですが、違う視点で取り組んだほうがいずれば伐採される木を減らすことにつながるのになって。柿守人と柿栽培の仕事を、どちらも軌道に乗せていきたいですね」。

そのナリワイのゼミで先生を担当したのは、東京から鶴岡市大鳥地区に移り住んだ田口比呂貴さん



昨秋、羽黒町の柿畑を正式に借りられることになった佐久間さん。今春から新たな気持ちで柿栽培に励みます。

収入だけを見るのではなく、自給力を高めた暮らしも実現させながらナリワイを構築していきたい。

庄内を代表する秋の味覚、庄内柿。明治時代に鶴岡の篤農家によって普及したこの平核無柿は、昭和に入って庄内一円に広まりました。しかし近年は担い手のいない放置された柿畑が増えていきます。そんな中、庄内柿の生産農家に新規参入した女性があります。仙台市出身の佐久間麻都香さんです。
佐久間さんが柿栽培を始めたのは、山形大学大学院農学研究科を修了した平成25年、「ここ鶴岡で生きるための農業ができれば」と、畜産農家で農業研修をしていた時でした。「その研修先にある日、親戚の柿畑を誰かに任せたいと相談があったんです。それでまずは私がやってみようと、その畑の世話をしてきた方に教えてもらいながら始めたところ、放置された柿畑が他にもあると知って。そんな時にナリワイに出会いました」。ナリワイとは、女性のプチ起業



今年4月で協力隊の任期が終わる田口さん。「この3年間で地に足をつけて動くことの大切さを学びましたね」

です。ゼミでは体験談を元にした講義の他、受講生によるビジネスモデルの発表会やブレスト会議といった実践的な内容を展開しました。「人に何か伝えることは嫌いじゃないので先生役を引き受けましたが、僕自身がまだナリワイづくりの最中ですからね」と田口さん。過疎化が進み、限界集落といわれる大鳥地区に、「地域おこし協力隊」として平成25年5月に移住した田口さん。以来、地元の猟友会の熊狩りに参加したり、山菜やキノコを採ったり、エネルギーの自家発電に取り組んだり、大鳥だけでなく庄内一円を飛び回りながら、精力的に活動してきました。「でも、それが浮足立った活動に見えたんでしょうね。2年が過ぎた頃、何のために大鳥に来たのかと指摘してくれた人がいて。それで3年目は原点に立ち返って地域で活動してきました。大鳥の人たちの目はごまかせませんね（笑）」。

田口さんは今、大鳥の人たちの聞き書きに励んでいます。似ているようで違う地域の色を住人たちの歴史の中から探り出せば、それが集落の盾にも矛にもなるはずとの思いからです。協力隊の任期終了後も、大鳥に住みながらこの活動を続ける予定とか。「山の暮らしを体現できる人間になること、若い世代が山に住める可能性を模索してその方法論を発信すること。この二つが当初からの目標です。それをここで実践しながら、集落が維持できるような変化を、大鳥の人たちと一緒につくっていききたいですね」。それぞれの地で自分の道を切り開こうと歩む若者たち。新しい季節がじき庄内に訪れます。

田口比呂貴さん(左)／昭和61年、山形県村山市生まれ。父親の転勤で幼少期から高校生までを川崎、大阪で過ごす。法政大学卒業後、都内の企業に就職。平成25年5月、地域おこし協力隊として鶴岡市大鳥地区に移住。自身のブログ「ひろろーぐ」で山暮らしを発信中。

暮らし始めれば、そこはもう故郷。
移住者ならではの視点で、庄内を楽しみ盛り上げていく。

Haga Takatoshi
芳賀崇利さん

特集
私たちの
庄内暮らし
My Shonai Life

新しい郷土愛の かたち

中村雄季さん
Nakamura Yuki

「まさか事業まで始めるとは、思
いもしなかったですね」と笑顔で
話す芳賀崇利さんは、平成26年9
月に「Imagine」を立ち上げ、同
年12月からユーザー参加型の地域
情報ポータルサイト「庄内コン
シエルジュ」を運営しています。



営業でさまざまなお店に向かう芳賀さん。鶴岡市内にある「オーボナクイユ」の丸山孝一シェフとは良き仕事のパートナーです。

首都圏で生まれ育ち、学び、働
いてきた芳賀さんが庄内で暮らし
始めたのは、事業立ち上げの2年
ほど前のこと。鶴岡市で暮らすお
父さまを訪ねて遊びに来たことが
きっかけでした。「父とも随分会っ
ていなかったの、旅行気分です遊
びに来てみたんです」。久しぶり
の庄内で過ごす、お父さまとの時
間。このわずか数日の間に、芳賀
さんの気持ちに大きな変化が訪れ
ます。「今回を逃したらこの先、
父と暮らすことは一生ないだろう
と思い、決断しました」。

こうして始まった芳賀さんの庄
内暮らし。何をやるにも東京の生
活と比べてしまったりと、初めは
あまり楽しめなかったそうです。
心境が変化したのは、ポータルサ
イトを立ち上げ、取材に出歩くよ
うになってからのこと。「遊ぶと
ころもない、友だちもいないとく
すぶっていましたが、今思えば自



遊佐町の畑で農業用ビニールハウスを組み立てる中村さん。「昨年生まれた娘と妻のためにも頑張らない」と語ります。

芳賀崇利さん(右)／昭和54年、埼玉
県三郷市生まれ。父親が庄内に単身
赴任で暮らしていたため、小学生の
時から定期的に来庄。首都圏で複数
の仕事を経験し、平成24年、鶴岡市
に移住。「庄内コンシエルジュ」を地域
NO.1の情報サイトにすべく、庄内中
を走り回る日々。「Imagine」代表。

中村雄季さん(左)／昭和57年、埼玉
県入間市生まれ。学生時代に働いて
いた環境保護NGOでWebに慣れて興
味を持ち、大学卒業後、新卒でWeb
ディレクターとなる。農業への転職を
考えて平成25年、庄内に移住。アラ
スカで暮らしてみたり、就農前から仕
事の合間を縫って生産者を訪ねたりと、
行動派な一面も。

庄内はまだまだ楽しくなる



自然と地域と一体になって

◎日本西海岸計画
シリコンバレーのあるアメリカ西海岸
になぞらえ、庄内を新しい産業エリア
にする。これを目的としたプロジェクト。
勉強会などビジネス分野の取り組み
はもちろん、空き家をリノベーションし
たゲストハウス「シヨウナイベース」やコ
ワーキングスペース「アンダーバー」、若
者向けトークイベント「モシエフ大学」
など、多角的な取り組みで地域活性
化を目指している。

「庄内は人と人とのつながりが強
い地域だから、僕のようなイター
ナーや長く地元を離れていたU
ターン者って自然と集まるんです
ね。同じ立場の仲間とつながれた
おかげで、こちらでの暮らしをス
ムーズに始めることができました」。
自然への高い関心から環境保護

取材・文 藤田拓也

NGOで働いていたこともある中
村さんが、庄内で目指すのは「自
然とよりそう暮らし」。約1年半
の修業期間を経て、平成27年4月
に遊佐町で新規就農しました。

「一人と知り合ったら、一気につ
ながりが広がっていききました」。
平成25年7月に酒田市出身の奥さ
まと庄内に越してきた中村雄季さ
んは、当手を振り返って話します。

「『これがきっかけ』という明確
な記憶はないんですが、環境問題
には高校生の頃から興味がありま
した。将来的には、自分の真似を
すれば誰でも自然とよりそう暮ら
しができる、そんな仕組みをつく
りたいですね。まずは自分の農業
スタイルを確立して家族を養って
いけるようになることが目標です」。
庄内を元気にしたいと、お二人
は「日本西海岸計画」プロジエク
トにも参加しています。「これか
ら移住してくる人たちが同じ苦労
をしなくて済むように、しっかり
受け皿の整備をしていきたいです
ね」と移住支援をメインに取り組
む芳賀さん。「いろんな人が出入
りして活躍することで庄内を盛り
上げ、将来的に庄内から世界へ発
信できるようなプロジェクトになれ
ばいいなと思います」と中村さん。

自身の暮らしを楽しみながら、
地域も活気づける。彼らのような
存在が、庄内に新風を起すキー
パーソンとなるのかもしれない。

ご夫妻にとって思い出の場所でもある酒田。厚い人情と粹な文化、魅力ある町を盛り上げたいと活動の場を広げています。

Orake Michiyo

大竹みち代さん

×

大竹清志さん

Orake Kiyoshi

釣り文化の 伝え手に

庄内弁の響きに癒やされます



粹な釣り文化で地方創生を

が専門で、そのエサを釣る技術ばかりを磨いていましたが「酒田の釣り仲間から教わった生きエサを使わない『かぶら釣り』が想像以上に面白かった。自分自身、釣りの良さである遊びの部分忘れていたことに気づかされて、酒田にはなんて粹な釣り文化が息づいているんだろうと驚きましたね」。

角田市と酒田を行き来する中で、移住を決意したのは、2011年の東日本大震災の時。親交のあった酒田の釣り仲間から「まず酒田さ来い。来たらいいなや」の声に心を決めたのだそう。「せっかく

「子どもが小さい頃は、夏になると家族で酒田を訪れるのが恒例でした。美しい庄内浜で遊び、釣りを堪能したものです」と思い出を語ってくださったのは、5年前に宮城県角田市から移住した大竹清志さん、みち代さんご夫妻です。仕事で初めて訪れて以来、次第に酒田の風土や人々にひかれていったという清志さん。「私の慕っていたおばが常々『酒田はいいところ』と話していたこともあり、小さい頃から身近に感じていました。私は18年ほど前から釣り専門紙のライターとして関東を中心に伊豆南諸島や東北の海域を巡っていますが、庄内浜は獲れる魚種が130種以上と豊富です。藩主、酒井公が武士の心身鍛錬のために磯釣りを奨励した歴史を持ち、かつ名竿、庄内竿の発祥地でもある。魅力的な地域なんですよ」。

清志さんはもとも超大物釣り



今年2月、日向コミュニティセンターで行われた、第2回酒田市移住者交流会では、寒鰯の解体ショーを実演。



漁師の師匠である高橋明さんと。漁法はもちろん天気の見方まで漁業者としての基盤を一から教わったという。

酒田で暮らすのだから、漁師になりたいと門を叩きましたが、最初は門前払いで」と苦笑いする清志さん。師匠と呼べる人に出会ってその熱意が衰り、1年がかりで第七浜長丸の船長となったものの、漁業の現状には不安を抱いているといいます。「漁業従事者は減る一方で、子どもたちは釣りの経験も少ない。これからも美味しい魚を味わってもらうには、次世代に伝えなければいけないことがたくさんあるはず。魚がどんな環境で生きているのか、どう食べると美味しいのか。生物を扱うので、生死について考えることにもつながります。今こそ、私たち漁師が行動を起こす時かもしれません」。釣りや漁業の振興に役立てばと、子ども会の釣り指導や寒鰯の解体ショーに協力するなど、清志さんは積極的な活動を続けています。2年前からは、釣り仲間であり、釣り餌メーカー、マルキュー(株)の研究者、長岡寛氏との二人三脚で、生エサを超える人工エサ開発にも取り組んでいます。「生分解性素

大竹清志さん(左)／釣りが大好きで、横浜在住時、超大物釣りの国内第一人者に師事。水処理会社経営、「週刊つりニュース」専属ライターに加え、宮城県角田市から酒田に移住後は念願の漁師に。人工エサ開発にも携わる他、「島海山やわた前ノ川釣り大会」の発起人である福田伴男氏とも親交が深く、現在は釣り文化を庄内から発信する企画を模索中。

県内外の釣り好きが集まる庄内。豊かな釣り文化が息づく庄内浜だからこそ、新たな漁業のあり方を目指したいですね。

取材・文 土門かおり

本然一体を絵にしたような景色に心ひかれ
すべてを受容するかのような風土に導かれて
鳥海山麓に住み、夢を広げるお二人がいます。

Nojima Ryo

能登谷良さん

×

長登文一さん

Naganobori Bunichi

自然と創る 町の光

「とにかく山が好き。見ることも行くことも」と話す能登谷良さんは鶴岡市生まれ。学生時代から山行きに親しみ、社会人になってからは仕事で国内を飛び回っていました。能登谷さんは20代の頃から将来設計をしていたといい、退職



鳥海山の森が「遊佐町の美しいハート」を描く自然の造形美。金俣地区の農林漁業体験実習館「さんゆう」からの眺め。

後は田舎で暮らすこと、その移住先も山形県外に決めていました。そんな折、たまたま遊佐町白井新田地区を訪れます。「ちょうど日が暮れる頃、今住まいのある場所に立っただけです。背には鳥海山、眼下に日本海、その日の夕陽が本当にすばらしくて」。その絶景に感動した能登谷さんは、一転してこの土地で暮らすことに決めます。「朝起きると山を見て、自然を読むような毎日は新鮮で。山を眺めて1日をスタートできるなんて、この上ない喜びです」。

鳥海山をまた別の角度から眺めて暮らす長登文一さんも、以前から自らの未来図を描いていました。「退職後に見た雑誌に、日本の三大湧水として鳥海山と書かれていました。我々の生命源は水でしょ。人生の後半は水の良い土地で過ごそうと思っただけです。その矢先にテレビ番組で牛渡川が映って、こ



「昔、集落と集落をつないで、子どもたちが駆けたであろう道を、花の道をつないであげたい。それが10年の夢」。

能登谷良さん(右)／鶴岡市出身。会社員時代は各地に赴任し、平成13年に遊佐町白井新田藤井地区へ。60歳で退職し、平成24年からは同町の集落支援員としても活動。奥様が営むパン屋「BAKU表」は、夫婦で15年を節目と決めていたことから昨年末に閉店。NPO法人いなか暮らし遊佐応援団副理事長。

長登文一さん(左)／56歳で退職後、移住先を国内外で検討。メディアで遊佐町を知ったことをきっかけに、平成18年、神奈川県横浜市から遊佐町吉出袋地区に移住。平成20年、鳥海山を一望する「ギャラリー&ティールームSUI」をオープン。NPO法人いなか暮らし遊佐応援団副理事長。

山と暮らすには最高の場所



「美しいハート」を合言葉に

夢は日本の原風景をランドデザインすること。
山のようにおらかなリズムで、
次の世代につなぎながら、叶えていきたい。

遊佐町に来て以来、自身に課してきたのが「過去を語るより、半歩先を話す」こと。「たくさん話せる夢をここで持ちたい」その思いから能登谷さんと意気投合し、夢を語り合うようになりました。「こんなにきれいな町はないですよ。磨けばもっときれいになる。

それが観光につながるはず」と長登さん。能登谷さんは「ここはすごい」ってスポットが至る所にある。その場所をつないでいけたら。景色にひかれて住み始めた場所、新たに広がった景色。お二人の視線の先にあるのは、日本の原風景をランドデザインすること。その展望を形にしたいと昨年、「NPO法人いなか暮らし遊佐応援団」を設立しました。「高畠町在住の詩人の星寛治さんが、ある講演で『庄内の美しいハート遊佐町』と紹介したそうです。私たちのNPOはこの美しいハートに根ざした活動をしようって」。この先10年の夢と活動は、日本の原風景の再生。「昔の子どもたちが歩いて育った道が今は手つかずになっています。でも、手入れをすればまたきれいになる。その手始めに『花の道』を作ればいいんじゃないかって。みんな花を育てて、それが集落から集落へと広がって、町を花の道でつないでみたいなあ。語るだけで終わらせず、次の世代へと託したい、とお二人。山のおらかなリズムのように、じっくりとゆっくりと叶えていく、そんな美しい夢の道がここから始まります。

特集
私たちの
庄内暮らし
My Shonai Life



庄内写真季行 26 月山・柴灯森

春の嵐が過ぎ、晴れ渡る月山。稜線には、厳しい冬の名残が刻み付けられていた。

月山の春の足どりは遅い。田植えの準備が進む眼下の庄内平野とは対照的に、寒の戻りが残した爪痕が、月山の冬の厳しさを物語る。人々は、すべての生を拒むかのようなその荒々しさに、畏敬の念を抱いてきたに違いない。

しかしその一方で、雪の下では、高山植物たちが来るべき時に備えて、じっと力を蓄え続けている。長く厳しい冬があるからこそ、それらが一気に咲き誇る短い夏に、生の喜びを感じ取ることができるのだらう。

艶やかで、可愛らしくて
レトロで、モダンで、洋にも和にも。
老若男女の乙女心を呼び起こす布の花々が
鶴岡の絹発祥地で続々登場

くらふと松ヶ岡こうでらいねの 絹まちモダンつまみ細工

3センチ四方の小さな布をピンセットでつまみ、折り畳んで1片の花びらを作っていく。江戸時代からかんざしなどに使われてきたこの伝統的な技を用い、鶴岡の絹に新たな命を吹き込む工芸品が生まれた。手掛けているのは、鶴岡市羽黒町松ヶ岡開墾場内の観光施設「くらふと松ヶ岡こうでらいね」に参画する地元クラフト作家たち。鶴岡産の羽二重などを材料に、各々の技を駆使したつまみ細工で色とりどりの花を咲かせている。

クラフト作家たちによるこの「絹まちモダンつまみ細工」は、平成26年6月に展示販売を始めた、想像を上回る反響が起きた。度々開催するワークショップも常に満員で、30代から70代の女性たちがみんな乙女のように目を輝かせて作るという。そんな姿を見るにつれ、代表の石堂佳美さんは「庄内の人には、布を触るのが好きというDNAが組み込まれている」と実感するとか。

そもそも庄内は、絹で近代化を乗り越えた地域である。明治初め、旧庄内藩士たちが後に松ヶ岡と呼ばれる荒野を開墾し、興した養蚕業の事業は、その後どんどん広がって、庄内は絹織物の一大産地へ。一時は鶴岡の二軒に一軒が絹関連の仕事をするまでになったという。DNA説の由来である。そうやって地域を支え、地域の歴史を作ってきたものを、新たな形で一人一人が暮らしの中に取り入れれば、鶴岡の絹は未来へとつながるはず。それがこの花々に込められた思いである。

つまんで、布を重ねて組み合わせ、糊でくっつけて。シンプルな材料と作業の先に待っている絹まちモダンの粋な色彩の世界へ、いざあなたも。



絹まちモダンつまみ細工を常設販売している「くらふと松ヶ岡こうでらいね」は3月不定休、4/1(金)から通常営業(10:00~16:00/月曜定休)です。庄内町ギャラリー温泉「町湯」で開催中の「町湯のひなまつり」でもつまみ細工を展示販売中(〜3/29)。またこうでらいねでは作り手を募集しています。委託販売も可。詳細は下記にお問い合わせください。

くらふと松ヶ岡こうでらいね ☎ 0235-62-2888





表御門内側の椿と松

春告草の傍らに、一本の楷の木がある。楷の木は孔子にちなんで中国から入り、学問の木ともいわれる。花を咲かせない楷の木もあるというが、昨年、植えてから24年目にして、この木が初めて花を咲かせたという。東京の湯島聖堂にある孔子像の近くの楷の木や、岡山の閑谷学校にある二本の楷の木のように、この楷の木もいずれは致道館のシンボルリーになるであろう。

朝日子の化身の梅のほつほつと
—あべ小萩

でも花を散らすことなく、雪中に一本だけじっと耐えていた。

残雪の田に青空の鳶降り来

—丹羽藤

庄内藩校致道館は、酒井家九代藩主・忠徳公によって、1805(文化2)年に創設された。東北地方に唯一現存する藩校建造物で、国指定史跡となっている。当時、諸藩が幕府の方針に従い、朱子学を教学とする中、致道館は荻生徂徠の「徂徠学」を採用し、「天性重視・個性伸長」「自学自習」「会業」を重んじる教育を進めた。



聖廟の東にある梅の木

庄内俳句紀行

春告草の咲く 致道館を歩く

日を重ねるごとに明るく強く暖かくなる春の日差し。春障子の柔らかい光がゆかしい気分させてくれる。その光が、障子越しに芽吹き前の木の影を透し、季節を映し出している。

季語
春告草
(はるつゆぐさ)

春の季語。梅の別称。梅は他にも花の兄、好文木、句草、春待草などと呼ばれる。

堂々とした佇まいの表御門をくぐる時、冬を越して役目を果たした松の雪吊りが青空に映えていた。講堂の屋根の酢漿草かたばみの御紋に見守られて歩く。講堂へと続く石畳の両脇には、まだ雪が残っていた。

致道館には種類の違う梅の木が何本も植えられており、毎春、一番に咲く春告草が、聖廟せいびやうの東にある。例年は2月に綻ぶというが、今年は年明けまで雪が降らなかつたせいか、12月下旬に花が咲いた。1月になってようやく積雪となり、それ

講堂の中。季節の良い頃は白い障子を明け放しているが、余寒の残るこの時期は、しっかりと戸が閉められていた。磨かれた廊下を歩くと、障子から優しい光が入り込む。凜とした空気が張りつめるこの空間は、二百年の時の流れを感じさせない。藩士の子弟が学んだ往時の情調に浸る。今はまだ雪に覆われてひっそりとした中庭も、緑生い茂る頃には葉陰から「御入間おひりま」へと風が通り抜ける。きっと庄内論語を素読する子どもたちの元気な声も一緒に運んでくれるであろう。

春障子もの音昼を深めけり

—成瀬櫻桃子

雪解の脇からのぞく春泥に気を配りながら戻ると、さつき気づかなかつた金魚葉椿の花が見送ってくれた。表御門を出ると、雀が三羽、日溜まりに遊んでいる。鳥や風や一輪の花が、庄内の遅い春ももうそこまで来ているとささやく。そこには今も沈潜の風が流れている。

藩校の金魚葉椿日に泳ぐ

—あべ小萩



楷の木



春告草



表御門